



こんな視点で
生活科

vol.2

遊びに没頭する 一幼保小接続・架け橋期の考え方

文科大学教授・光村図書「国語」編集委員 藤森裕治

① 遊びの中に学びあり

幼児期の遊びには学びへの要素が詰まっています。例えば「道具づくり」では図形に対する関心が、「鬼ごっこ」ではルールを守るという規範意識が、「ままごと」では社会生活との関わりや言葉による伝え合いなどが経験されます。これらは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実現する重要な要素であるとともに、学校生活で学ぶさまざまな教育内容と地続きです。遊びがもつこうした働きを「生活科」で受け継ぎ、創造的でわくわくする題材を見つけましょう。学びは子どもたちの心身に、いつの間にか染み込んでいきます。



② トリックスター (Trickster)

複数の子どもが関わる遊びの中では、しばしば「困った子」が出現します。ルールを守らず、突飛な言動を繰り返す子。いたずら心が顔をもたげ、作りかけていたものを台無しにする子。こんな子たちです。彼らの行動は安定を乱しますが、時として新しいルールやアイデアを創造するきっかけとなります。



ある幼稚園での出来事です。雨樋をつなげて水路を作っていたところにAちゃんがやって来て、次々と変な物を流して水路を壊してしまいました。リーダーのBちゃんは憤慨しますが、強い水流に耐えられる水路へと修繕します。Aちゃんのいたずらが、新しい発想をもたらしたわけです。このような子を文化人類学ではトリックスターとよびます。こうした存在を受容する姿勢が、子どもたちの生活文化を豊かにするのです。

③ 一次のことばと二次のことば

子どもの言語発達を考えるうえで大切な概念の一つに「一次のことば・二次のことば」※1があります。家族や友達など、親しい人どうしで用いられる言語が一次のことば。書き言葉など、現実と離れた場面で用いられる言語が二次のことばです。子どもたちの使うことばは、具体物や表情などを手がかりにできる一次のことばから、そうしたものがない状況でも伝わる、抽象的な二次のことばへと発達していきます。



これを推進する上で欠かせないのが、遊びの中に埋め込まれたさまざまなルールです。トリックスター的な子をも加えて楽しく遊べるルールを試行錯誤するとき、より抽象的で一般的な語彙を獲得していきます。

④ アプロプリエーション (Appropriation)

アプロプリエーションとは、他者のことばを自分が使うことばに取り込んでいくことを言います。※2

自分たちで作ったおもちゃの自動車レースをしていたCちゃんが、スタートのときに「レディ・ゴー」と声をかけました。このレースに参加していたDちゃんは、後日、園庭でのかけっこで「レディ・ゴー」と声がけしています。DちゃんはCちゃんのことばを自分の語彙に取り込み、これを使ってみたわけです。このように、子どもたちはさまざまな関わりの中で他者のことばに触れ、そこから自分のことばを豊かにする契機を見出していくのです。先生はそのための環境構成に配慮することが大切です。



※1 岡本夏木、1985『ことばと発達』岩波新書 ※2 J.ワーチ、2004『心の声』福村出版



光村図書

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q

